

週日の説教

金 大烈 神父 2010年3月10日(水)

《私達一人ひとりとは特別な存在》

おはようございます

自分にとって「赦さなければならない人」と、「赦してもらわなければならない人」と、どちらが多いでしょう。皆様、「赦さなければならない人」と「赦してもらいたい人」と、どちらが多いでしょうか。どうですか？（誰からも反応がなく、日本語ですよ！と司祭が言い、皆が笑った）皆様ね、自分の今の信仰を量るためには良い基準です。「赦さなければならない人」が多いか、「赦してもらわなければならない人」が多いか。「赦してもらわなければならない人」が段々増えてきますと、それは皆様が上手く行っている証拠です。「赦さなければならない！」と思って、神様が「赦さなければならない」とおっしゃったから、無理やり「そうしなければならない」と自分を悩ませている人だったらまだです。信仰的に味が深くなると、「赦して頂きたい人」が増えて来ます。これは、実際にそういう人が多いか少ないかの問題ではありません。自分の心の働きです。

私達が「ああ、赦してもらわなければならない」という心が増えて来ますと、赦せない人がいなくなります。それがひとつの回心の正しい見る目ではないかと思えます。いつも皆様が、「私は今どうなっているのか」と考えるときに、私は「赦してもらわなければならない！」そして、「沢山赦してもらった！」という気持ちがあれば、皆様は成功的な信仰の生活をしていると信じてもいいと思えます。

さあ、違う話に入ります。

ある司祭が日曜日のミサで、信者全員に呼びかけ、青いリボンをそれぞれの胸に付けてあげました。そのリボンには「あなたは私にとって、本当に特別な人です。」と書かれてありました。司祭は一人ひとりの胸に付けてあげながら、「あなたにとって特別な方にこのリボンを付けて下さい。」と他に二枚のリボンをあげました。それを頂いたある信者が「誰につけたら良いか。」と思案し、うちの司祭は、「私を特別に大事な人と認めてくれたけれど、私が特別な人と考えるべき人はいるか。」と思いながら、ある仲の良い友人にそのリボンを付けたのです。その方は信者ではありませんでしたが、それをもって気持ち良くなりました。「あなたは私にとって特別な人です。」「You are special to me.」

本当に気持ち良くなって、その人も、もらったそのリボンをもた「私は誰かにこれをあげたいけれど誰がいいか、誰が相応しいか」と考えて、会社の社長さんを思い浮かべました。その社長さんは、会社の人々にあまり評判が良くなかったのです。怖くて、いつもあれこれうるさくて、社員は皆社長さんが好きではありませんでした。しかしこの人は、社員が皆集まる機会があったそのときに、社長さんにリボンを付けました。「これは何ですか？」と言う社長さんの間に「あなたのことについて、色々な話を聞いていますが、私の目では、創造的でリーダーシップがあり積極性を考えてみても、そのあなたの持っているタレントによって、この会社が上手く行っていると思えますので、これをあなたに

率直な心で差し上げたいのです。」付けられたその社長さんは、やっぱり気持ち良くなります。

そして彼もまた悩みます。「誰にこれをあげたらいいのか」と。そして思い出したのが自分の息子でした。退社時間を待って家に帰り、子供を呼んで何も言わずに自分の胸に付いていたそのリボンを外して子供の胸に付けました。そして、「私は仕事で忙しく、君に暖かい心を見せたこともないし、成績表を見てはいつも叱って来たから、君の立場では私が君を嫌っていると思っているかも知れないが、そうじゃないのだよ。世の中が変わっても、お母さんと共にあなたは私にとって一番特別な存在だよ。」と説明しました。その話を聞いた子供は泣き始めました。「お父さん、私はこの世の中が大嫌いになって、明日自殺しようと思を決めたところです。特に親から愛されない者だったら、私はもう生きる意味がないと思って、自殺しようと思っていました。でも今日お父さんがこのように話して下さったから、私は今までの自分の思いが、間違っていたことを確信します。」と言いながら、その子供は自殺を思いとどまり救われたという話です。

このような心で私達が、関わっている人々一人一人に心を配ることが出来れば、色々なことで挫折を味わっている人も、救われるのではないかと思います。皆様もそう思いますよね。ただこの手を伸ばすことによって、人々が救われることがあるのを分かっているながら、難しく、なかなか出来ない。それが私を含めて、私達全ての人々の姿じゃないかと思います。

宣教と言われても、そんなに難しいことと思わないで下さい。私達が暖かい心を持って、関わりのある人を心配しながら、何か一言でもかけてみれば、その人は必ず反応をみせてくれます。そのような心で、私達が信仰の生活をすればいいのではないかと考えてみました。

司祭が取ったその態度は、「神様にとって一人一人は特別ですよ」と言う意味だったでしょうね。私達も「神様にとっては一人一人が皆、特別であること、大事な存在であること」を感謝しながら行きましょう。

今日の福音に（マタイ 5・17-19）律法の話がありました。『律法の文字から一点一画も消え去ることはない。』とイエス様がおっしゃったのですが、この教会にも他の教会にも掟がありますよね。法律はある意味で人を圧迫します。法律なしに成熟な生き方ができればそれは最高です。しかし人間の限界でしょう。人が集まったらしょうがなく法律を必要とします。その法律はやっぱり私達に不便さを与えます。法律が生じた、作られた理由、その理由を私達が読めれば、読むことが出来れば、そんなに負担ではなくて、重荷ではなくて、自発的に守ることが出来るのではないかと思います。

教会の法律は、教会のためにあるのではなく、“核である私達のためにある”ことを意識すれば、いいのではないのでしょうか。

ありがとうございました。

